

市内に広がる「地域の寺子屋」

～寺子屋から生まれる子どもと大人の豊かな関係～



地域の寺子屋事業
イメージキャラクター「寺ッコ」

教育委員会事務局生涯学習推進課 指導主事 **高橋 徹**
 (「はじめに」「おわりに」)

寺子屋「菅人(すげんちゅ)」運営委員会 委員長 **羽鳥 祥子**
 (菅小学校での寺子屋の取り組みから 1～7)



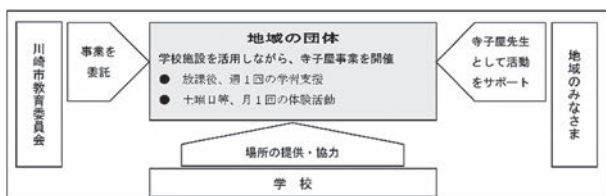
はじめに

本市では、子どもが18歳未満の世帯のうち共働き家庭が半数を超える状況となっている。また、全世帯数のうち核家族世帯と単独世帯を合わせると9割を超えている状況である。

こうした家庭の状況から、放課後1人で過ごしている子どもが多くいることや、家でじっくりと宿題を見てあげられる余裕のない家庭もあること、さらに日常的に祖父母の世代と関わる機会が少ない子どもが多いことなどが指摘されていた。

このような社会状況を背景に、次の3つの目標を掲げて、平成26年度から「地域の寺子屋事業」がスタートした。

- 地域ぐるみで子どもたちの学習や体験をサポートする仕組みづくり
- シニア世代をはじめとする地域のさまざまな方の知識と経験を活かした、多世代で学ぶ生涯学習の拠点づくり
- 子どもたちに豊かな学びや体験の機会を提供することによる学ぶ意欲の向上や豊かな人間性の形成



本事業では、教育委員会が地域の団体に事業を委託し、学校施設を活用しながら、放課後、週1回の学習支援と、土曜日等に月1回の体験活動を実施している。子ども達の学習や体験をサポートしてくれる方(以下「寺子屋先生」という。)は、広く地域から募っている。

では、実際の寺子屋の様子について、運営を通して感じたことなどを紹介したい。

菅小学校での寺子屋の取り組みから～寺子屋事業で見つけた「子どもの人権」と「社会教育」のヒント

1 寺子屋事業のたちあげ

(1) きっかけ

平成30(2018)年4月、菅小学校に戸塚校長が赴任された。「菅という地域には、たくさんの協力的な方がいて、子どもたちを見守ってくださる土壤がある。寺子屋事業にはぴったりの学校。羽鳥さん、子どもたちのために菅小で、寺子屋をやりませんか？」PTA・OB会の事務局として、何度かお会いしているときに、そう声をかけていただいた。地域教育会議の代表者会議で、寺子屋事業の説明を受けていた私は興味もあったので、PTA役員時代に一緒に活動していた仲間2人に声をかけ、その秋から準備をはじめた。12月には運営委員会を立ち上げ、翌年の3月に体験活動(JAXA バルーンロケット教室)を開催し、スタートとなった。名称は、寺子屋「菅人(すげんちゅ)」(以下、「寺子屋すげんちゅ」という。)に決定した。「菅人」は毎年運動会前に菅小PTAが作成しているTシャツのロゴからいただいたもので、菅小の児童にも保護者にも身近なワードだ。



(2) 学習教室

寺子屋事業は、毎週の学習教室と月1回程度の体験活動の二本柱だ。学習教室の方は、令和元(2019)年6月に開講した。2年目の今年度は新型コロナウイルスの影響で8月にやっと準備を始め、昨年度よ

り希望者は減ったが、3～6年生の児童33名を迎え、寺子屋コーディネーター3名、寺子屋先生11名(以下、「寺子屋スタッフ」という。)で10月から開講した。毎週水曜日、子どもたちは帰りの会が終わると一目散に学習教室の会場である図書室の廊下に並ぶ。コロナ対策の今年は寺子屋開始前の手洗いと検温が必要だ。各テーブルにアクリル板のつい立てを用意し、口の動きや表情が見やすいように寺子屋専用のマスクも全員分準備した。学習教室では、学校の宿題、寺子屋プリント、工作などをするお楽しみ(すげんちゅタイム)をして1時間過ごす。終了後は昨年度までと違い、消毒作業やつい立ての片づけなど、色々やることは多いが、寺子屋先生たちが手際よくやってくださる。

(3) すげんちゅタイム

寺子屋1時間のうち、最後の15分～20分は「すげんちゅタイム」。この時間が好きで参加している子どもも多い。ある寺子屋先生が「今の子どもたちは手先を使う経験が少なくなっているから、手先を使う何かができるといい」と提案くださったことから、簡単な工作(紙飛行機、しおり作り、六角パズル)やコマ回しなどを行っている。また、今年度から他の寺子屋先生のアイデアで「県名ビンゴ」や、「水素や酸素など原子・分子の話」なども取り入れている。ちょっと物知りになる機会でもある。かなり充実した寺子屋になってきたが、立ち上げの当初は試行錯誤もあった。



すげんちゅタイム 福笑い
令和2(2020)年1月

2 寺子屋事業は「ファジーなところ」がいい

寺子屋を立ち上げる前に、運営メンバー3名で「寺子屋コーディネーター養成講座」を受講した。内容の濃い講座で、毎回学ぶことが多かったが、最後の宮越隆夫さんの講話が印象的だった。「寺子屋のいいところは、ファジーな部分。初めからルールや規則を多くしてやるのではなく、経験しながら出会った

さまざまな場面で相談しながら良い形に収れんしていく…。」つまり、実際に寺子屋をやる際に、地域のどんな方が寺子屋先生として手伝ってくれるのか、どんな子どもたちが参加してくれるのかわからないから、柔軟性を持たせて、事象が起こったその都度、みんなで考えて進めていくのが子どもにも、スタッフにもいいという話だった。講座を受けるごとに責任の重さを感じていたが、気を取り直した。「寺子屋すげんちゅ」の活動方針として、「必ず、寺子屋終了後は寺子屋先生たちと振り返りをしよう。寺子屋を作るのは、コーディネーターだけではなく、寺子屋スタッフ。寺子屋先生たちの想いを受け止め、子どもの様子を共有する時間を大切にしよう。」と決めた。



すげんちゅタイム
紙コップフリスビー
令和2(2020)年11月

3 寺子屋スタッフの「振り返りの会」

(1) 寺子屋先生たち

寺子屋先生になってくださった方は、元小学校教員、定年退職した会社員、元幼稚園教諭、青少年の活動の支援者、町会の役員、子育てが落ち着いた主婦、図書ボランティアさん、青少年指導員さん、元中学校教員、元PTA会長など多様で、30代から80代まで幅広い年齢層。見解も、意識もさまざまだし、お互い初対面の人がほとんどだった。

(2) 振り返りの会で

寺子屋をはじめたばかりの頃、振り返りの会で、こんな意見や質問があった。「宿題は、そもそも家でやるものだろう。そして、親が見るべきものだ。寺子屋で宿題をやらせていいのか。」「ちょっと落ち着きのない子がいる。あの子をどうにかしないと。けじめをつけさせる必要がある。」「漢字の書き順がでたらめの子にどうやって声掛けしたらいいか。1週間に1回じゃ、直してあげたくても難しい。」

その都度、意見交換をした。寺子屋先生養成講座や、地域教育会議の研修で聞いた話を思い出しながら、今の社会教育に求められていることや、現在の共働き・子育て世帯の事情を伝えた。地域の大人に褒められたり、認められたりした子は、学ぶことに

意欲を持てるようになり、大人になってもいろんな困難を乗り越えられるし、前向きな気持ちになるという大学の先生の話も伝えた。また、問題の子どもの様子を観察していたスタッフの1人がその子の特徴を伝え、異なる見方を述べることもあった。一方的な見解のままにせず、多方面からの視点、情報を織り込んで、寺子屋スタッフみんなで考え、悩んで進めてきた。それを繰り返してきた結果、大きな発見があった。お互いの考えていること、思っていることがわかると、自然と距離が近くなるらしい。寺子屋スタッフ同士の信頼関係もかなり深まってきたのだ。そして、その信頼関係によって、寺子屋の空気があたたかくなり、大人の笑顔も増えていく。素晴らしい人材、チームワークがあつての「寺子屋すげんちゅ」。敏感な子どもたちはそれを感じ、安心して過ごしてくれている気がする。



学習教室の様子
令和2(2020)年10月

4 今年の学習教室の様子

(1) 子どもからのサイン

水曜日の放課後、「こんちくわー!よろしくお願いします!」、「今日のすげんちゅタイムは何やるの?」など、元気に寺子屋にやってくる子どもたち。毎週、3～6年生約30名の子が参加している。

しかし、

A「あー、寺子屋にまたきちゃった～」

B「宿題めんどくさい、やらなくちゃだめ?家でやるからさ」

C「今日のすげんちゅタイム、福笑い?つまんない、帰っていい?」

こんな風に寺子屋スタッフに話しかけてくる子もいる。とてもかわいい。私たちは、その子からの「サイン」＝“相手をして”や“なんか、話したい”だと知っているので、

A「〇〇さん、今日も来てくれてよかったよー。ありがとう。」

B「そうか、宿題毎日大変だよね。今日はどんな宿

題なの?寺子屋のおもしろプリントもあるよ。」

C「福笑い、もう飽きたかぁ。でもちょっと変わったルールでやるからさ、一緒にやろうよ。」

などと対応する。寺子屋スタッフとの会話がある程度楽しんだ子どもたちは、やがて宿題や音読や、プリントに取り組みはじめるのだ。

(2) 音読の宿題

音読は寺子屋先生に聞いてほしい子がたくさんいる。自宅では、おうちの人に「またその話?もう何度も聞いて飽きたわ」とか、「今、つかえたところ、もう一度やり直し!」などと言われるらしい。でも寺子屋先生は、じっくり聞いてくれるし、たっぷり褒めてくれる。



音読の様子
令和元(2019)年6月

5 子どもの人権

(1) コップの水の話

10年位前、PTA会員研修で「人権」をテーマにした講義を聞いた。そこで、講師の方が「大人の言い分を聞くと“子どもが親の言うことをきかなくて困る”という。一方、子どもの言い分を聞くと“親が僕の(私の)いうことをきいてくれない”と不満をいう。双方、同じことを感じている…」と話した。そして、それを解決する方法として水の入ったコップに例えて説明してくれた。

～親も子も、相手に言いたい・主張したいことがいっぱいある状態は、たとえるなら、自分の胸の中のコップも、相手の胸の中のコップもみなみとあふれそうなくらい水が入っていて、もう1滴も入らない状態。相手のコップに自分のコップの水を注いでもこぼれてしまう。どうすればいいか…。それには、まず、自分のコップの水をすべて空にして、つまり自分の主張は忘れて、相手のコップの水を受けとる。そうしたら、相手のコップが空になる。次に自分が水を注ぐ番になって～…という話だった。今、その意味がよ

くわかるし、とても納得する。子どもにだって、考えや言い分はあり、それを聞くのも大人の役目である。

(2) 寺子屋で考える人権

私たちは寺子屋の子どもたちに「寺子屋で、わかった!できた!の経験をしてほしい。」と伝えたい。それにはまず、子どもの話したい、言いたい、やりたいに耳を傾け、それを受け止めること。すると、必ず子どもたちに寺子屋の想いが伝わるのだと、寺子屋スタッフ一同、実感している。まさにこのコップの話なのだ。

6 奇跡のスタッフ

寺子屋先生の1人がこう話した。「我が子が小学生の頃は、余裕がなく、子どもの“サイン”がわからず、『いいから、言うこと聞きなさい!』と頭ごなしに怒っていたのに、この寺子屋では来てくれる子どもたちが愛おしく、かわいくて仕方ない。どうしても、自分の子育てのとき、こんな風にできなかったかな。」そう過去を振り返りながら、子どもに寄り添っている寺子屋先生たちの姿は素敵だ。寺子屋で学び直しをする大人の姿がある。また、開講当初は子どもへの声掛けや、まる付けもぎこちなかった寺子屋先生たちが、子どもたちからたくさんの自信をもらって、今、キラキラと輝いて子どもと接し、笑顔で過ごしている。

「寺子屋すげんちゅ」は、寺子屋先生になってくれた地域の方たちと、一緒に立ち上げてくれたコーディネーター2人と共に作り上げたものであり、これからも学び合い、よりよい環境にしていきたいと思う。

私たちにできることは「子どもたちのすごいところをいっぱい見つけて、はっきりと言葉で、それを伝えること。」それを教えてくれたのは、寺子屋の子どもたちと寺子屋先生たちだ。このすばらしい奇跡のスタッフと、これからも楽しく寺子屋をやっていききたい。

7 最後に

私はこれまで「社会教育」や「子どもの人権」について、地域教育会議の活動や、子ども会議の企画、子どもの人権フォーラムに参加しながら考えてきた。子どもたちの将来のために地域の大人がやれることは何なのか、ずっと模索してきた。その糸口が寺子

屋事業にあった。今、子どもたちに伝えるとすれば、「子どももひとりの人間。他の人と違っていいし、自分で考えていい。大人だってミスや間違いをするから、それを疑問に思っていていいし、指摘していい。それをちゃんと聞く、認める大人もいるよ。」ということ。それをこれからもいろんな所で伝えて、形にして、私の同志を増やしていきたい。



体験活動「プログラミング教室」
令和2(2020)年11月

おわりに

寺子屋すげんちゅの取り組みから、寺子屋が子どもたちの学習意欲を培う場であること、地域の大人や異クラス・異学年の子どもとの交流を通じて人と関わる力を養う場となっていること、さらに、保護者も含めて地域の大人同士もつながり、学び合う場となっていることが分かる。寺子屋は、単なる子どもの学力向上事業ではなく、地域ぐるみで子どもを育てる仕組みづくりをする事業なのである。

令和2(2020)年11月30日現在、市内では61か所の寺子屋が開講している。コロナ以前は、学習支援に100名を超える登録があり、学年やクラスでグループ分けをして実施せざるを得ない状況となっている寺子屋も多かった。また、土曜日の体験活動についても、たびたび抽選になる状況であった。「毎週参加したい・させたい」という声に応えるためには、寺子屋先生の確保が重要であり、養成講座や広報などに力を入れている。

また、「うちの学校でも寺子屋をやってほしい」という声も多く、運営を担っていただける人の発掘と立ち上げまでの支援、開講した後の運営のフォローも教育委員会が二人三脚で行う。

寺子屋では、子どもも大人も、みんなが笑顔で、本当に楽しそうにしている様子が印象的である。この笑顔は川崎の中でもっと広がっていくことができるように、今後も本事業を推進していきたい。